

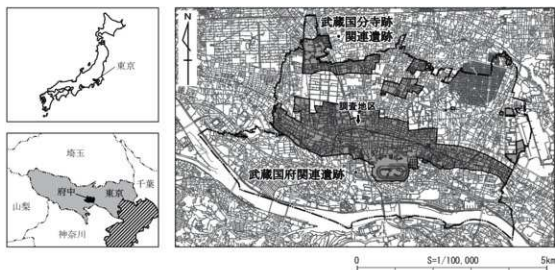
第1章 調査の概観

第1節 調査に至る経緯

令和元年3月、当該地における集合住宅建設について、事業主である日鉄興和不動産株式会社（以下、事業主とする）から、埋蔵文化財の取り扱いに関する照会が府中市教育委員会（以下、府中市とする）にあった。府中市は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地の武蔵国府関連遺跡（府中市№2）にあたり、建築計画の内容から埋蔵文化財の保存に影響がある可能性があることを説明した。

事業主は、同年4月10日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届を府中市に提出した。府中市は、東京都教育委員会（以下、東京都とする）に対し、事前の発掘調査が必要であると意見具申した。東京都は、事業主に対して事前の発掘調査の実施を通知（31教地管理第296号）した。

これを受けて府中市は、同年5月7日・8日にかけて試掘調査を行った。試掘調査の結果、奈良・平安時代の溝・土坑等の遺構を検出したため、本調査が必要であると判断した。本調査は、事業主から依頼を受けた共和開発株式会社（以下、共和開発とする）が実施することとなり、共和開発より提示された計画書をもとに、同年5月21日に「武蔵国府関連遺跡（仮称）寿町2丁目プロジェクト埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」が事業主、共和開発、府中市の三者間で取り交わされた。その後、同年5月17日に共和開発から法第92条に基づく発掘調査の届出が府中市を経由して東京都へ提出された。共和開発は、東京都から発掘調査実施の通知（31教地管理第296号の2）を受けて、同年6月3日に現地発掘調査に着手した。



第1図 調査地区の位置（1/100,000）

第2節 調査地区の位置

今回の調査地区は、東京府中市^{ことぶきちやう} 寿町二丁目4番9他に所在し、京王電鉄京王線府中駅より北北西に約400m、市内を東西に走る甲州街道（国道20号線）と南北に走る府中街道（都道17号線）が交差する地点の北東側に位置し、府中市立府中第一小学校が東接する（第2・3図）。この場所は府中市の『武蔵国府関連遺跡』（府中市No.2遺跡）の中央部やや北側にあたり、国史跡『武蔵国府跡』の中心に位置する大國魂神社境内を基点とすると北北西約750mに位置している。

府中市は、多摩川流域の左岸にあたり、地形は南から市域の約1/3を占める多摩川流域の沖積低地、台地部である立川段丘面（Tc面）、武蔵野段丘面（M面）で形成されている。立川段丘面は市域の台地部分の大半を占め、通称「ハケ」と呼ばれる府中崖線によって多摩川の沖積低地と分けられており、その比高は8～15mを測る。

本調査地区は、府中崖線から北側に入り込んだ標高57.0m付近の立川段丘上に位置している。調査地区周辺の地形はほぼ平坦である。

なお、今回の調査地区は、市域調査の際に用いるグリッドのM37区に該当し、M37区における20番目の調査にあたり、調査次数は1827次である。

第3節 周辺の遺跡と近隣の調査地区

1. 周辺の遺跡

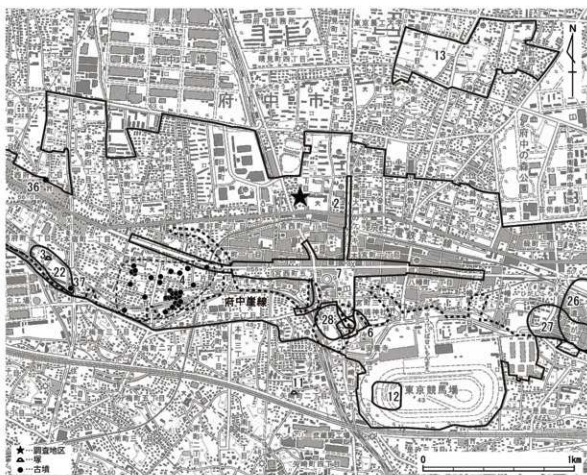
今回の調査地区は、先述したように『武蔵国府関連遺跡』（府中市No.2）の中央部やや北側にあたる。『武蔵国府関連遺跡』は、府中崖線に沿って府中市域の中央部分を東西6.5km、南北最大1.8kmの広大な範囲に展開する遺跡群である。その範囲は、昭和50年（1975）以降の発掘調査成果による遺跡のあり方から、東側の調布市側から「白糸台地域」、清水が丘地域、国府地域、高倉・美好町地域、西府・本宿町地域の5つに区分されており、本調査地区は、このうちの「国府地域」に該当する。

また、『武蔵国府関連遺跡』は奈良・平安時代を中心とした遺跡であるが、縄文時代から近世の多岐に亘る遺跡も含んでおり、それらは別の遺跡として扱われている。

縄文時代では、府中崖線に沿って西から『本宿町遺跡』（府中市No.22）、『大國魂神社裏遺跡』（府中市No.6）、『清水が丘遺跡』（府中市No.26）などの草創期から晩期にいたる各時期の遺構や遺物が検出されており、とくに縄文中期を主体とした集落遺跡が多い。

弥生時代では、多摩川によって形成された沖積低地の微高地上に位置する『日吉町遺跡』（府中市No.12）で、弥生時代前期の再葬墓と前期から中期初頭の居住跡が発見され、他に土器・石器なども出土していることから、付近に当該期の集落が展開していると考えられている。

古墳時代では、府中崖線から入り込む開析谷沿いに立地する『清水が丘西遺跡』（府中市No.27）、『本町遺跡』（府中市No.28）で前期を主体とした集落跡が発見されている。続く中期の集落跡は現在のところ発見されておらず不明であるが、後期に入ると『武蔵国府関連遺跡』



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
2	武蔵国府関連遺跡	片町 寺町 小柳町 清水が丘 白糸台八幡町 府中町 分梅町 本宿町 緑町 宮西町 宮町 美好町 若松町	台地・低地	官衙・集落	旧石器, 縄文 (早・前・中・後), 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世, 近世
3	御影塚	本宿町一丁目	台地縁辺	塚	中世
4	高倉古墳群	分梅町一丁目 美好町三丁目 片町二丁目	台地	古墳	古墳
6	大國魂神社裏遺跡	宮町三丁目	台地・低地・谷	集落・社寺	縄文 (中・後・晩), 古墳, 奈良, 平安, 中世
7	府中宿	宮西町一〜五丁目 宮町一〜三丁目 八幡町一・二丁目 片町二丁目 寿町一丁目 美好町三丁目 本町二丁目	台地	社寺・宿場	近世
11	三千人塚	矢崎町二丁目	低地	塚	中世
12	日吉町遺跡	日吉町東京競馬場	低地	包蔵地・社寺	縄文 (中), 中世
13	天神町遺跡	天神町一〜四丁目 幸町二・三丁目	台地	包蔵地	旧石器, 縄文 (早・前・中・後), 奈良, 平安
22	本宿町遺跡	本宿一丁目府中第五小学校 西府町一丁目	台地	集落	縄文 (早・中・後), 奈良, 平安, 中世
26	清水が丘遺跡	若松町一丁目 清水が丘一〜三丁目	台地	集落	縄文 (早・中・後・晩)
27	清水が丘西遺跡	清水が丘一・二丁目 八幡町三丁目	台地	集落	古墳
28	本町遺跡	本町一丁目 宮町三丁目	台地	方形周溝墓	古墳
36	武蔵府中熊野神社古墳	西府町二丁目	台地	古墳	古墳
37	御影塚古墳群 1号墳	本宿町一丁目	台地	古墳	古墳

の国府地域と白糸台地域で竪穴建物跡が確認されている。この時代には、集落の他に府中崖線に沿って多くの古墳群が見られるようになり、東から『白糸台古墳群』（府中市Na 24・枠外）、『高倉古墳群』（府中市Na 4）、『御嶽塚古墳群 1 号墳』（府中市Na 37）の群集墳が確認されている。また、西府町では、府中崖線から約 500 m 台地側に入った平坦地に 7 世紀中頃に築造された、全国的にも稀少な上田下方墳の『武蔵府中熊野神社古墳』（府中市Na 36）が存在し、平成 17 年（2005）に国史跡として指定され、保存・整備されている。

中世の遺跡は、現府中街道や旧甲州街道などの街道筋周辺や、大國魂神社・分倍河原駅・西府駅付近などで発見されている。府中街道沿いの宮西町から宮町地域では、銭貨大量埋納遺構や中世の土坑墓群、地下式横穴墓・地下式坑などが検出されている。また、大國魂神社南側の斜面地でも当該期の土坑墓群が調査されている。さらに、府中市では当該期の板碑が多数確認されており、康元元年（1256）銘の板碑が現存し、骨蔵器が検出された『三千人塚』（府中市Na 11）がある。

近世においては、甲州街道の宿場とされる『府中宿』（府中市Na 7）がある。とくに宮町地域を中心とした旧甲州街道沿いでは、近世以降の建物跡や陶磁器類などが多数発見されている。近年では、『本町遺跡』の調査において柵列や建物跡や厩跡、大型の井戸、三葉文紋の入った鬼瓦などが出土しており、初期徳川將軍家の府中御殿の一部であることが確認されている。

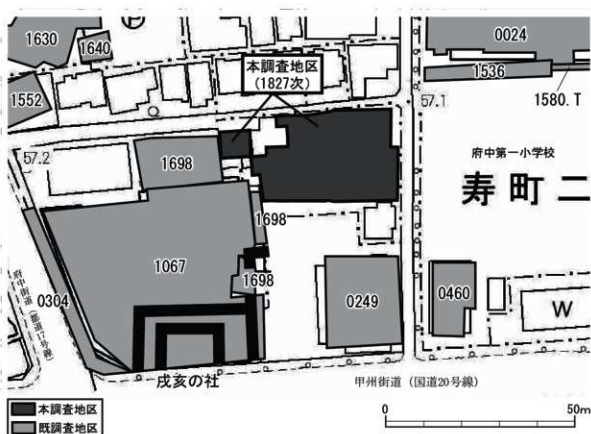
2. 近隣の調査地区

本調査地区は、先述した通り、『武蔵国府関連遺跡』の「国府地域」に該当し、奈良・平安時代の竪穴建物跡や溝、土坑などが検出された。近隣では、過去の調査において、数多くの奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

本調査地区は、大國魂神社境内から北北西約 750 m に位置し、西隣は 1698 次、南西側は 1067 次、南側は 249 次として発掘調査が行われている。1067 次調査では、二重の溝で囲まれた方形区画遺構が発見され、遺構の構成や武蔵国衙跡の北西方向（戌亥）に位置することなどから、国府の護り社（戌亥隅神）であった可能性が指摘され、「戌亥の社」は、8 世紀後葉に国府が北西方向へと拡充するに伴い、元来の官衙ブロックと新たに拡充する工房ブロックを隔てる目的で造営されたと考えられる（江口 2014a）。社が機能していた 8 世紀後葉から 9 世紀前半に、付近に構築された建物跡は、区画に対して一定の距離を置き、中心の掘立柱建物跡の南北中軸線より西側に建てられるなどの規制が働いていたと考えられている（『概報 22』）。

1067 次・1698 次調査において検出された 9 世紀前半の竪穴建物跡（M 36 - S I 53・54・56・57・73、M 37 - S I 10）は、いずれも掘立柱建物跡の中軸線上の西側、区画溝から距離を置いた北側に位置する。これに対して、10 世紀後半の M 36 - S I 55 は、区画溝に接して建てられており、遅くとも 10 世紀後半までには、区画溝は埋没しており、規制は弱まっていたことを示唆する調査結果が得られている（共和開発 2016a）。

南側の 249 次調査では、掘立柱建物跡 2 棟（M 37 - S B 1・2）、溝 3 条（M 37 - S D 5 ～ 7）などが検出されている。溝は、調査地区の西から東に延び東側で南に折れ、建物（M 37 - S B 1・2）を L 字形に囲うように配置されている大型のもの（M 37 - S D 6）とそこから派生する形で北側に延びていく小型のもの（M 37 - S D 5）が検出されている（第 5 図）。



第2表 近隣の調査地区一覧表

通次数	地区名	掲載報告書	SA	SB	SD	SE	SF	SI	SK	SX	SZ
0024	市立府中第一小学校 1次	『概報 33』		1	5			15	8		
0249	デニーズ寿町店	『概報 20』	1	2	3				3		
0304	主要地方道所沢府中線 (第17号)	『報告 8』						2			
0460	府中市立第一学童クラブ	『概報 29』			3			2	4		
1067	コジマ NEW 府中店	『概報 22』		4	9			6	28	8	
1536	府中市立府中第一小学校耐震補強工事	『報告 49』			1			1		1	
1552	BESTIAL STAR FICHE	『概報 45』						3	1	3	
1580.1	府中市立府中第一小学校校庭芝生化整備工事	『概報 45』						3		2	
1630	リストレジデンス府中	『概報 47』			1			4	2	4	1
1640	リストレジデンス府中	『概報 47』			2			1	4		
1698	コープ府中寿町店	共和開発株式会社 2016			1			2	3		
1827	リビオ府中寿町	本報告			4			1	8	1	

(SA=雑踏, SB=並立住居建物, SD=溝, SE=井戸跡, SF=道路跡, SI=型穴建物跡, SK=土坑, SX=その他の遺構, SZ=墳墓)

第4節 調査の経過

本調査は、令和元年6月3日から7月26日まで行った。調査面積は、建物建設予定範囲内の840.4㎡である。

調査地区が2箇所に分かれていたため、東からA区・B区と設定し、更にA区は掘削土量の関係で2つに分け、東側をA-①区・西側をA-②区として調査を行った（凡例2参照）。また、調査地区の外周には近隣住人・歩行者等の安全を考慮して、ガードフェンスを設置した。

調査は、6月3日から開始し、発掘資機材や重機・仮設事務所などの搬入後、重機による表土掘削から行った。同時に、国家座標値を用いて記録を行うため、最寄りの公共基準点から座標値を調査地区内に移動する作業を行った。

6月3日からA-①区の調査を開始し、同月28日からA-②区、B区の調査に着手した。各調査地区では遺構の調査が完了した後、全景写真を撮影し、7月22日に府中市教育委員会の完了検査を受け、翌23日から25日にかけて埋め戻しを完了し、26日に現場養生シートの設置・現地撤収をして全体の調査を完了した。

確認された遺構の調査は、基本的に土層観察帯の設定、覆土の半截、土層観察帯の視察・写真撮影・図面作成、完掘、完掘写真撮影、測量機器による平面図の作成の順に行ったが、その過程で、遺物微細図などの追加図面の作成といった補助的な作業も行った。

なお、遺構平面図の作成は、府中市が設定しているグリッドを用いており、高さの基準は、東京湾平均海面（T.P）を用いたものである。

また、遺構から出土した遺物は、必要に応じてトータルステーションにて3次元座標値を記録して取り上げている。

以下に、現地調査の経過を示しておく。

令和元年

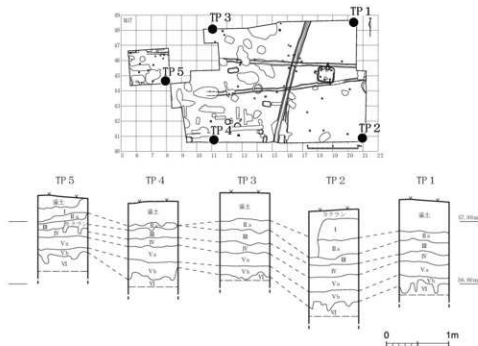
- 6月3日 仮設事務所・発掘資機材搬入、調査区設定後重機を搬入し、A-①区の表土掘削開始。
- 6月5日 A-①区表土掘削完了、人力掘削による遺構検出作業完了後検出全景写真撮影。
- 6月6日 A-①区遺構調査開始。
- 6月26日 A-①区遺構調査完了、全景写真撮影、埋め戻し作業開始。
- 6月28日 A-①区埋め戻し作業完了。B区表土掘削開始・完了、遺構検出作業開始。A-②区表土掘削開始。
- 7月2日 B区遺構検出作業完了、検出全景写真撮影、遺構調査開始。
- 7月3日 A-②区表土掘削・遺構検出作業完了、検出全景写真撮影、遺構調査開始。
- 7月5日 B区遺構調査完了、全景写真撮影。
- 7月19日 A-②区遺構調査完了、全景写真撮影。
- 7月22日 A-②区・B区埋め戻し作業開始。
- 7月25日 A-②区・B区埋め戻し作業完了、重機搬出。
- 7月26日 仮設事務所・発掘資機材搬出。撤収完了。

第5節 基本層序

本調査地区は、標高 57.20 ～ 57.40 m の立川段丘上に位置し、現状の地形は北から南に向かってやや低くなっている。基本土層の観察は、調査地区隅付近の 5 箇所で行った（第 4 図、図版 8）。

調査地区内ほぼ全域に亘って、砕石等が混ざる現代の盛土が堆積しており、TP 1（A 区）で約 50cm、TP 5（B 区）で約 15cm と西から東に向かって厚くなっている。盛土中には、部分的にⅢ層土まで達する攪乱が含まれるが、直下からは府中市基本土層であるⅠ～Ⅱa 層、Ⅲ～Ⅵ層土の堆積が確認された。Ⅰ・Ⅱ層土は盛土や攪乱によって削平されている箇所も見られたが、Ⅲ層土以下の遺存状態は良好であった。各層の層厚は、Ⅲ層（ローム漸移層）で 10 ～ 20cm、Ⅳ層（ソフトローム層）で約 15cm、Ⅴa 層（ソフトローム層）で約 20cm とほぼ一定であるのに対し、Ⅵ層（ハードローム層）との漸移層であるⅤb 層はⅥ層との境が凹凸の著しい不連続面を形成している。

本調査地区内の旧地形を考えるにあたって、Ⅲ層土が検出される標高を基準に比較すると、最も高い TP 5 が約 57.00 m、TP 3・4 が約 56.90 m、TP 1 が約 56.70 m、最も低い TP 2 が約 56.50cm となっており、TP 5 から TP 2 へ向かって約 50cm 低くなっている。このことから、本調査区内の旧地形は、北西から南東へ向かって徐々に低くなっていたと考えられる。



第4図 基本土層観察位置図（1／300）、柱状図（1／60）

基本土層 土層説明

- 盛土 埋褐色土 小粒～大粒のローム粒子を少量含む。ロームブロック（～30mm）が見られる。ロングリートガラ、籾（～100mm）等が混じる。
- I 埋褐色土 やや灰色地があり、全体的にサラサラする。小粒のローム粒子を少量含む。小磯（～5mm）が見られる。近世以降の耕作土。
- IIa 埋褐色土 やや暗褐色が強く、ややスコリア質。小粒～中粒の黒色粒子を少量含む。
- IIb 埋褐色土 「武蔵野台地の立川ローム層標準層序」の「IIb」層に相当。部分的にIIa層が見える。
- IV 埋褐色土 ローム漸移層。赤色スコリアが見られる。
- Va 黄褐色土 「武蔵野台地の立川ローム層標準層序」の「III」層に相当。ソフトローム層。極小粒の黒色粒子・赤色スコリアを微量含む。
- Vb 黄褐色土 Va層よりやや暗い。「武蔵野台地の立川ローム層標準層序」の「III」層に相当。ソフトローム層。極小粒～中粒の暗化鉄を少量含む。
- VI 黄褐色土 Vb層より明るい。「武蔵野台地の立川ローム層標準層序」の「IV」層に相当。ハードローム層。極小粒～小粒の赤色スコリアを微量。極小粒の黒色スコリアを少量含む。極小粒～小粒の青灰色スコリアが見られる。

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査では、竪穴建物跡1棟、溝4条、土坑8基、その他の遺構1基、ビット45基及び、土師器・須恵器・陶器・瓦・鉄製品などの遺物が合わせて84点出土した（第3表）。

確認された遺構の番号は以下の通りである。

竪穴建物跡	1棟	M 37 - S I 12
溝	4条	M 37 - S D 44 ~ 47
土坑	8基	M 37 - S K 49 ~ 56
その他の遺構	1基	M 37 - S X 17
ビット	45基	P 20 - 001 ~ 045

第3表 出土遺物数量表

遺構名	土師器	須恵器	陶器	不明土器	瓦	鉄製品	合計
M 37 - S I 12	30	1	0	0	0	0	31
M 37 - S D 44	5	1	2	0	0	0	8
M 37 - S K 50	0	0	0	0	0	1	1
M 37 - S K 53	2	1	0	0	0	0	3
M 37 - S K 54	0	0	0	1	0	0	1
M 37 - S K 55	2	0	1	0	0	0	3
M 37 - S K 56	2	2	2	1	0	2	9
M 37 - S X 17	2	0	0	0	0	0	2
P 20 - 017	0	1	0	0	0	0	1
P 20 - 026	1	0	0	0	0	0	1
P 20 - 043	1	0	0	0	0	0	1
盛土	5	4	1	0	1	0	11
攪乱	7	3	1	0	1	0	12
合計	57	13	7	2	2	3	84

第2節 遺構と遺物

1. 竪穴建物跡

M 37 - S I 12（別表1・5-1、図面2～4・10、図版2・3・9）

遺構 本遺構は、M 37（17～19、44・45）区に位置する。竈煙道上部はS D 44、南東隅上部はS D 45に切られ、西壁中央上部は攪乱されているが、いずれも遺構の下部までには及んでおらず、全体的に遺存状態は良好である。

平面形は、隅丸方形を呈し、規模は南北約 3.2 m、東西 3.4 m を測り、主軸方向は N-9°-E を指す。

床面は、ほぼ全面に貼り床され、黒褐色土とロームブロック・粒子の混合土で構築されている。全体的に薄く、一部地山が露出している箇所も見られる。硬質面は、出入口と想定される南壁中央部付近と竈焚口手前付近で確認された。掘り方は、東側の数箇所に窪みが見られるが、全体的に平坦に掘られている。

壁は、確認面から床面までの深さが最大 46cm を測り、やや斜めに立ち上がる。壁下には周溝が巡るが、北東隅付近で途切れる。周溝の規模は、幅 12～16cm、深さ 10～12 cm を測る。

ビットは、床面で 7 個検出した。位置関係から、P 4 は出入口施設に伴うもの、P 2・3・6・7 が主柱穴もしくは柱を立てた位置である可能性が考えられる。しかし、P 2・3・6・7 は、いずれも深さが 20cm 未満と浅く、底面に柱当りも観察されないことから、判然としない。

覆土は、13 層に分けられ、1～7 層は暗褐色土を主体とする。8～13 層はローム粒子・ブロックを多く含み、断面三角形の堆積も観察されることから、壁周辺からの崩落土と考えられる。14 層は黒褐色土とロームブロックから成る貼り床構築土である。

竈は、北壁中央に設けられており、天井から煙道上部にかけて S D 44・P 20-019 に切られている。竈は床面を半楕円形に掘り下げ、そこから北壁を掘り込んで、掘り方としている。掘り方には暗褐色土が充填され、竈軸は建物内側へ約 50cm 張り出し、主に灰白色砂質粘土を用いて構築されている。焚口は建物内にあり、燃焼部から煙道部にかけて急角度で立ち上がり、煙道部から煙出し部へかけては緩やかに高くなっている。

遺物出土状態 遺物は、土師器 30 点・須恵器 1 点の 31 点が出土し、竈がある北側、出入口があったと考えられる南側に集中している（図面 4）。

1001 は、竈両側の床面から出土し、東側から出土した胴上半部は口縁部を上に向け、1007 を内包した状態で出土した（図面 2-1、図版 3-2）。1002 は竈東袖手前の床面、1004 は竈東側の床面から出土している。1005 は南壁中央部付近の床面と竈内から出土し、1 個体分の殆どが南壁中央部から潰れた状態で出土した（図面 2-1、図版 3-3）。1006 は南壁中央部付近の覆土上層及び下層から出土している。

遺物 図示した遺物は、土師器 7 点（1001～1007）である（図面 10・図版 9）。

1001～1004 は同一個体と考えられる土師器甕で、1001 と 1003 は接合する。1001 は、胴部から頸部にかけて内湾し、口縁部は外反しながら立ち上がる。1002 は胴下半部で外傾しながら立ち上がる。1003 は 1001 と接合するが、端部の一边が摩耗しており、土器製作時の器面調整などの道具として使用された可能性がある。1004 は平底の底部から胴下部にかけてやや膨らみながら立ち上がる。1005 は土師器甕でほぼ 1 個体分残存する。接地面に対してやや角度がつく平底の底部から、胴部はやや膨らみ、口縁部にかけて「く」の字状に立ち上る。1006・1007 は土師器杯である。1006 は内外面に赤彩が施され、やや丸みのある底部から直線的に外傾しながら立ち上がる。1007 は、弧状の底部から口縁部にかけて断面半楕円状を呈する。

2. 溝

M37－SD44・45（別表2、図面5・6、図版4）

遺構 調査地区（A区）中央よりやや北をSD44、南をSD45が東西に走る。SD44はA区東壁からSI12の竈上部を含めた北壁の一部を切り、B区にまで達している。SD45は同じく東壁からSI12の南東隅を切り、SD44に対してやや南に傾きながらM37（11、43）区まで続く。両溝とも東端は東側の調査地区外へ延び、確認面からの深さは30cm未満と浅く、西端は調査地区内で確認できなくなるため、上部は削平されていると考えられる。

調査地区内における規模は、SD44はA区とB区を合わせて現存長30.2m、幅40～100cm、深さ15～28cmを測り、A区とB区間の未調査地区分も含めると約40m以上になる。SD45は現存長29.5m、幅60～80cm、深さ10～25cmを測る。溝の底面標高は、SD44は、東壁（A）で56.35m、B区東壁（D）で56.70m、SD45は東壁（A）で56.40m、西側（C）で56.95mとなっており、両溝とも西から東へ向かって緩やかに下っている。断面形は、概ね皿状を呈し、溝の底面は平坦である。覆土は両溝とも共通し、1層に黒色土粒子・赤色スコリア・ローム粒子、1・2層にローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物 SD44の覆土中から土師器5点、須恵器1点、陶器2点が出土したが、いずれも小片で図示できるものはなかった。SD45からの遺物の出土はなかった。

両溝の帰属時期は、遺構上層にIIa層が堆積していることや覆土の様相から古代から中世と考えられる。

M37－SD46（別表2、図面7、図版5）

遺構 調査地区（A区）中央やや東側を南北に貫き、SD44・45に切られる形で検出された。南北ともに調査地区外へ延びる。断面は概ね中段から肩にかけて外傾する逆台形を呈する。底面は凸凹しているが、これはやや掘削が困難となるVI層（ハードローム層）上面を底の目安としたためと考えられる。規模は、現存長24.8m、下端幅50cm・上端幅100cm、深さ50～75cmを測る。溝幅は一定に近く、直線的に丁寧に掘られている。溝の底面標高は、北壁（A）で55.85m、南壁（D）で56.05mと南から北へ緩く下がっている。主軸方向はN-15°-Eと東に偏る。覆土は五層に分けたが、ローム粒子を含む暗褐色土が主体で、底面直上はロームブロックと黒褐色土の混合土が堆積している。

遺物 遺物の出土はなかった。

帰属時期は、SD44・45に切られることや覆土の様相から、古代と考えられる。

M37－SD47（別表2、図面7、図版5）

遺構 調査地区（A区）南壁中央やや東から北へ走り、M37（15・16、42）区で途切れる。遺構の約半分が攪乱によって切られている。規模は、現存長6.3m、幅50cm、深さ10cm、断面は低い逆台形状を呈し、底面は平坦である。

覆土は三層に分けられ、1層中には近世以降の耕作土と考えられる灰色味を帯びた黒褐色土（I層）を含み、2層以下はローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物 遺物の出土はなかった。

帰属時期は、覆土の様相から近世以降と考えられる。

3. 土坑

M 37 - S K 49 (別表 3, 図面 8, 図版 6)

遺構 調査地区 (B 区) 北西隅の M 37 (5, 46) 区に位置し, 1/2 以上は調査地区外のため未検出である。南壁の一部を P 20 - 027 に切られる。上部は削平され, 遺存深度は浅い。

規模は, 長軸 160cm 以上×短軸 40cm 以上で, 深さは 16cm を測る。平面形は隅丸長方形と推定される。覆土は二層に分けられ, ローム粒子・赤色スコリアを含む暗褐色土を基調とする。

遺物 遺物の出土はなかった。

帰属時期は, 覆土の様相から古代と考えられる。

M 37 - S K 50 (別表 3・6, 図面 8・11, 図版 6・10)

遺構 調査地区 (A 区) 南壁中央付近の M 37 (14, 41) 区に位置し, 西側・北側が攪乱され, 上部も削平されているため, 遺存深度は浅い。

規模は, 径 100 ~ 102cm の円形と推定され, 深さは 26cm を測る。覆土は三層に分けられ, ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を基調とし, 1 層はややスコリア質である。

遺物 覆土中層から鉄釘 (M001) が出土している。

帰属時期は, 覆土の様相から古代と考えられ, 国府周辺で検出される古代の所謂「円形土坑」と考えられる。

M 37 - S K 51 (別表 3, 図面 8, 図版 6)

遺構 調査地区 (A 区) 南西部の M 37 (12, 41) 区に位置し, 南半部・上部は削平されているため, 遺存深度は浅い。

規模は, 径 126cm の円形と推定され, 深さは 38cm を測る。覆土は八層に分けられ, ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を基調とし, 1 層はややスコリア質である。

遺物 遺物の出土はなかった。

帰属時期は, 覆土の様相から古代と考えられ, 国府周辺で検出される古代の所謂「円形土坑」と考えられる。

M 37 - S K 52 (別表 3, 図面 8, 図版 6・7)

遺構 調査地区 (A 区) 南西部の M 37 (11・12, 41・42) 区に位置し, 東側の一部は攪乱されている。上部が削平されているため, 遺存深度は浅い。

規模は, 径 106cm の円形で, 深さは 20cm を測る。覆土は四層に分けられ, ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を基調とし, 1・2 層はややスコリア質である。

遺物 遺物の出土はなかった。

帰属時期は, 覆土の様相から古代と考えられ, 国府周辺で検出される古代の所謂「円形土坑」と考えられる。

M 37－SK 53 (別表3・5-2, 図面8・11, 図版6・7・10)

遺構 調査地区(A区)南西隅のM 37(9, 40)区に位置し、南西側の壁は調査地区外のため未検出である。北壁の一部が攪乱され、上部も削平されている。

規模は、径136～140cmの円形で、深さは48cmを測る。覆土は七層に分けられ、ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を基調とする。

遺物 覆土中から土師器2点、須恵器1点(1008)が出土した。

帰属時期は、出土遺物・覆土の様相から古代と考えられ、国府周辺で検出される古代の所謂「円形土坑」と考えられる。

M 37－SK 54 (別表3, 図面8, 図版6・7)

遺構 調査地区(A区)南壁中央付近のM 37(14, 40・41)区に位置し、南端は調査地区外のため未検出である。北壁上部が攪乱され、遺構の上部も削平されている。

規模は、長軸130cm以上×短軸70～78cmで、深さは42cmを測る。平面形は隅丸長方形と考えられる。覆土は四層に分けられ、ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を基調とし、1層はややスコリア質である。

遺物 覆土上層から不明土器1点が出土した。

帰属時期は、覆土の様相から古代と考えておきたい。

M 37－SK 55 (別表3, 図面8, 図版6・7)

遺構 調査地区(A区)中央やや南寄りのM 37(14, 42・43)区に位置し、上部は削平されているが、遺存状態は良好である。

規模は、長軸166cm×短軸96cmで、深さは46cmを測る。平面形はやや方形に近い隅丸長方形である。覆土は四層に分けられ、ローム粒子・赤色スコリアを含むややスコリア質の暗褐色土(1層)とローム粒子・ブロックを多量に含む黄褐色土(2層)が厚く堆積している。

遺物 覆土中から土師器2点、陶器1点が出土した。いずれも小片であり詳細は不明である。

帰属時期は、覆土の様相から古代と考えておきたい。

M 37－SK 56 (別表3・5-2・6, 図面8・11, 図版6・7・10)

遺構 調査地区(A区)中央より西のM 37(12, 45)区に位置し、上部は削平されているが、遺存状態は良好である。

規模は、長軸212cm×短軸94～106cmで、深さは48cmを測り、平面形は隅丸長方形である。覆土は四層に分けられ、1～3層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、底面直上にはローム粒子・焼土粒子のほか炭化粒子を含む黒褐色土が堆積する。

遺物 覆土から土師器2点・須恵器2点・陶器2点・不明土器1点・鉄製品2点が出土した。このうち下層から出土した陶器(常滑焼大甕・1009)1点、鉄釘2点(M002・003)を抽出した。

帰属時期は、出土遺物・覆土の様相から古代から中世と考えておきたい。

4. その他の遺構

M 37 - S X 17 (別表4・5-2, 図面9・11, 図版8・10)

遺構 調査地区(A区)東壁中央付近のM 37(20・21, 43・44)に位置し, 東半部以上は調査地区外のため未検出である。

規模は, 長軸238cm×短軸80cm以上で, 深さは70cmを測る。平面形は不明(不整形?), 断面形は南側が高くなる半楕円形である。覆土は四層に分けられ, ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

遺物 覆土中から土師器2点が出土し, うち1点(1010)を図示した。1010は内外が赤彩された土師器坯の口縁部と考えられる。

帰属時期は, 出土遺物・覆土の様相から古代と考えられる。

5. ビット(図面1, 図版1)

P 001 ~ 045 の45基を検出した。分布状況は調査地区(A区)中央やや北のM 37(16, 45・46)区で若干まとまる傾向があるが, 配列に規則性はなく, 全体的な密度は薄いと言える。深さが30cm以内のものが多く, 他の遺構と同様に浅いビットは, 攪乱・削平によって失われた可能性が考えられる。

平面形は円形もしくは楕円形で, 円形のものが多くを占め, 規模は径20cm~40cmを測る。覆土は灰褐色土を主体とした単層のものが多く見られる。

遺物は, P 20 - 017・026・043から土師器・須恵器が出土しているが, いずれも覆土上層かつ小片での出土であることから, 埋没時の流れ込みと考えられる。

帰属時期は, 検出状況と覆土の様相から近世以降と考えられる。

6. 遺構外出土遺物(別表5-2・6, 図面11, 図版10)

遺構外からは23点の遺物が出土した。内訳は, 土師器12点・須恵器7点・陶器2点・瓦2点である。その内, 実測に堪え得ると考えられる2点を図示した。1011は須恵器甕の頸部から胴部で, 口縁部が「く」の字状に立ち上がると考えられる。T001は平瓦で, 凸面に縄タキ痕, 凹面に布目痕が観察され, 側面はヘラ調整されている。いずれも古代の所産と考えられる。

第3章 まとめ

本調査では、堅穴建物跡1棟(M37-S I 12)、溝4条(M37-SD 44~47)、土坑8基(M37-S K 49~56)、その他の遺構1基(M37-S X 17)、ビット45基(P 20-001~045)が検出された。S I 12とSD 46は古代の遺構と考えられ、同時代の遺構は近隣の調査地区においても確認されている。本章では、それらの遺構とS I 12・SD 46との関係について、若干の検討を加えることで本調査のまとめとしたい(第5図)。

S I 12は、南北3.2m×東西3.4mで、北壁のほぼ中央に竈が設けられ、主軸はやや東側に傾く。ビットは、建物内から7個検出されており、南壁中央やや北寄りのものは出入口施設に伴うものと考えられる。建物内の四隅付近から検出されたものを柱穴と考えたが、穴の規模や状態から使用の可否については判然とせず、無柱穴の堅穴建物であった可能性は否定できない。

遺物は、建物内の覆土中から31点出土し、これらの内、土師器甕2点(1001・1005)、土師器杯2点(1006・1007)の4点は、所産時期の検討に耐え得る資料である。1001・1005はともに「く」字状口縁「武蔵型」甕で、8世紀後半の所産と考えられる。1001は胴上部から口縁部にかけて緩い「く」字状を呈し、胴部最大径が口縁部径を上回る。これに対し、1005はやや丸味のある胴部から口縁部にかけて「く」字状に立ち上がり、口縁部径が胴部最大径を上回る。1001が後に盛行する「コ」字状口縁「武蔵型」甕の要素を含んだ形態であることから、1005よりやや新しい時期の所産であると考えられる。1006・1007はともに丸味のある底部で、1006は体下部からやや直線的に外傾しながら立ち上がり、1007はやや内湾気味に立ち上がり、全体的に断面形が半楕円状を呈する。これらの器形的特徴から所産時期は8世紀前半でも第2四半期頃と考えられる。

これらの出土遺物の様相から、S I 12の帰属時期は8世紀前半(N 2期)で、遅くとも8世紀後半(N 4期)までには廃絶されていたと考えられる。

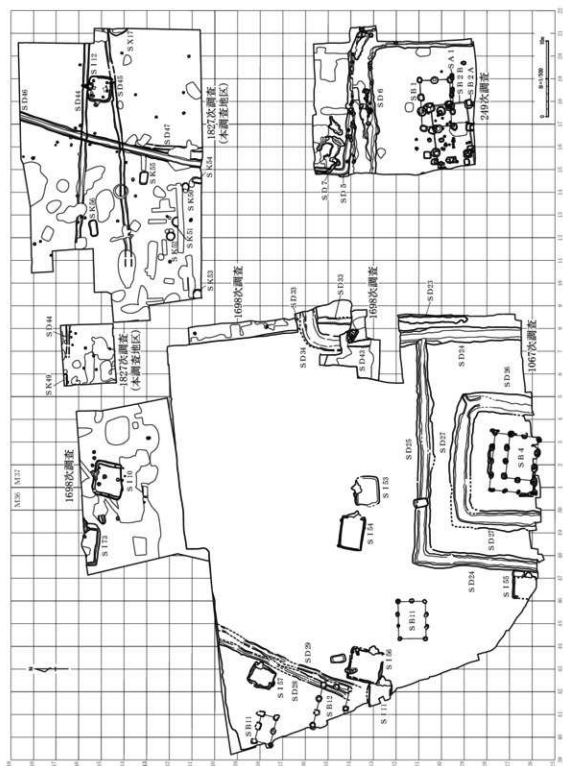
SD 46は、本調査区内を南北に貫くように検出され、位置関係と規模から、本調査地区から南に約15m離れた249次調査において検出された溝(M37-SD 5)と同一の遺構と推定される。SD 5は249次調査地区内の北西隅付近で東に屈曲している。また、SD 5が同調査地区内のSD 6に切られているため、溝全体の形状・長さは不明だが、SD 5・46の想定される長さは、間の未調査地区分も含めると50m以上になると考えられる。

遺物は、SD 46、SD 5ともに出土していないが、SD 6の覆土中から須恵器杯が出土している。この須恵器杯は、約2/5が残存しており、口径10.8cm(推定値)・底径6.2cm・内底径5.6cmで、底部外面には回転糸切り後外周回転ヘラ削りが施されていることから、9世紀前半の所産と考えられる。

これらの状況から、SD 5・46は8世紀末頃(H 1期)にはその機能を失っていた可能性が高いと考えられる。

本調査地区南西側の1067次調査地区の南側では、1棟の掘立柱建物(M37-S B 4)を中心に、その周囲を二重の溝(M37-24~27)が囲む方形区画遺構が検出されている。S

B 4 は、遺構の調査状況に加え、国衙から北西（戌亥）に位置し、周辺の調査地区から「戌」「神」墨書土器が出土していることなどから、「社」遺構（戌亥の社）と考えられている（江口 2014a）。また、その造営は、武蔵国府が北西方向に拡充する段階（8 世紀後葉）に元来の官衙ブロックと新たに拡充する地域とを隔てるといった土地利用を規制する目的も担っている



第 5 図 本調査地区と近隣調査地区の遺構配置 (1/500)

たとえられている（江口 2014a）。1067 次・1698 次調査において検出された 9 世紀前半の
 堅穴建物跡（M36－S I 53・54・56・57・73，M37－S I 10）は、いずれも社の南北中軸
 線より西側かつ社の区画溝から距離を置いて建てられており、当該期の規制の状況を示して
 いると考えられる。

本調査地区において検出した S I 12・S D 46 は、いずれも 8 世紀末までには廃絶されて
 いた可能性が高く、社が機能していた 8 世紀末から 9 世紀前半期には空白地となっていたと
 考えられる。ただし、S I 12・S D 46 の廃絶と社の造営間に大きな時期差は無く、その背
 景については、本調査地区の東側に広がる古代の堅穴建物跡が 70 棟以上検出されている府中
 市立第一小学校地区（24 次・37 次・63 次・242 次）を中心とした集落跡との検討を経なければ
 ならないと考える。

今回の調査において、戊亥の社が造営・機能していた時期の北東側には一定範囲の空白地
 が存在していた可能性が高いことを示せたことは、当該期の土地利用の実態を考察するうえ
 で、貴重な成果を得られたと考える。

引用・参考文献

- 荒井健治 2005『国府で行われた手工業生産－武蔵国府の事例から－』『国士館考古学』国士館大学考古学
 荒井健治 2011『東京都府中市武蔵国府跡』『東国古代遺跡研究会 第 1 回研究大会 関東甲信越地域の国衙と郡衙』東国古代遺跡研究会
 荒井健治 2014『武蔵国府の時系列的分析』『東京考古』32 東京考古談話会
 荒井健治 2015『武蔵国府の時系列的分析 2』『東京考古』33 東京考古談話会
 有吉重義編 2018『古瓦の考古学』考古調査ハンドブック 18（株）ニューサイエンス社
 江口 桂 2014a『古代武蔵国府の成立と展開』古代史叢書 13（株）同成社
 江口 桂編 2014b『古代官衙』考古調査ハンドブック 11（株）ニューサイエンス社
 共和開発株式会社 2012『武蔵国府関連遺跡調査報告－（仮称）東府中研修所新築計画地区－』株式会社ヘルス・共和開発株式会社
 共和開発株式会社 2016a『武蔵国府関連遺跡調査報告－国府地域の調査－ コープ府中寿町店埋蔵文化財発掘調査報告書』大和ハウス
 工業株式会社・共和開発株式会社
 共和開発株式会社 2016b『武蔵国府関連遺跡調査報告－国府地域の調査－ アンタレス府中新築工事埋蔵文化財発掘調査報告書』遠藤
 政宣・共和開発株式会社
 共和開発株式会社 2016c『武蔵国府関連遺跡調査報告－国府地域の調査－（仮称）府中市八幡町一丁目計画新築工事地区－』田中
 茂雄・共和開発株式会社
 共和開発株式会社 2017a『武蔵国府関連遺跡調査報告－西府・本宿町地域の調査－（仮称）セイガステージ分府河原原』新築工事に伴
 う発掘調査（1752 次） 誠賀建設株式会社・共和開発株式会社
 共和開発株式会社 2017b『武蔵国府関連遺跡調査報告－高倉・美好町地域の調査－（仮称）美好町 3 丁目計画 新築工事に伴う発掘調
 査（1755 次）』内藤由美子・共和開発株式会社
 大成エンジニアリング株式会社 2015『武蔵国府関連遺跡調査報告－イニシア府中ハウス新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
 塚原二郎 1988『武蔵国府関連遺跡発見の工所址について』『東京の遺跡』21 東京考古談話会
 野田憲一郎 2001『武蔵国府と工房』『多摩のあゆみ』103 たましん地域文化財団
 深澤靖幸 2003『武蔵国府における手工業生産』『府中市郷土の森博物館紀要』第 16 号
 福田健司 2017『土器編年と集落構造－落川・一の宮遺跡の出自と生産を探る－』考古調査ハンドブック 16（株）ニューサイエンス社
 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2002a『武蔵国府の調査 20 一昭和 59 年度府中市内調査概報－』
 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2002b『武蔵国府の調査 22 一平成 11 年度府中市内調査概報－』
 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2006『武蔵国府の調査 33 一昭和 50 ～ 60 年度府中市内調査概報－』
 山口眞一 1984『付論－武蔵国府関連遺跡における土器編年試論－』『府中市埋蔵文化財調査報告 第 5 集 一 国府地域の調査 4－』府中
 市教育委員会・府中市遺跡調査会
 山口眞一 1985『武蔵国府と奈良時代の土器様相』『東京考古』3 東京考古談話会